The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京阪方言に対する他地方出身者の意識と方言使用
Author(s)	ロング, ダニエル
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1989, 23, p. 41-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56510
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京阪方言に対する他地方出身者の意識と方言使用

ダニエル・ロング

1. はじめに

日本全国から，大阪または京都（以下，京阪地区と呼ぶ）に来ている大学生は京阪のことばに対してどのような意識を持っているか，また，どのように京阪の方言に対応しているか。本稿では，この問題をとりあげた調査の結果から，京阪という，方言意識に関して非常に特殊な地域の性格と，大学生の出身地のもつ様々な性格について考察する。

アンケートの形で，調査は1988年の１月から11月にかけて，大阪府と京都市（およびその近辺）の大学に在学中の学生を中心に行った（大学関係者などの社会人がインフォーマントの８％を占める）。回収された700余りの調査票から京都府と大阪府の出身者および出身地方を確定できない者を省いた。その結果，インフォーマントの数は426人になった。インフォーマントの出身地方は，５歳〜15歳（言語形成期とされる時期）の間に住んでいた地方とし（なお，この期間中，ほかの地方で１年以下の短期滞在があった場合にはそれを無視した），地方の分類に関しては，栃木と茨城を東北地方，新潟を北陸地方に入れた。

2. 言語意識と属性

調査では言語意識（言語に対する態度と言語の使用意識）に関する項目

を11設定した。

最初に，インフォーマントが京阪へ移住する前に出身地で方言をどれくらい使用していたかということをたずねた。質問とその結果は次のとおりである。

質問1　出身地で，学校の友達と話す時に出身地のことば（方言）を　(4)よく使った　(3)時々使った　(2)ほとんど使わなかった　(1)全然使わなかった

表 1　　出身地方での方言使用－－出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
人数 平均点	24 2.96	26 3.50	63 3.49	27 3.56	146 3.77	37 3.84	54 3.83	43 3.74	420 3.66
有意差[1]	*								

NHKが行った調査では若い人が方言を好意的に評価しているという結果がでているが（稲垣1980，191～2頁。NHK1980，8頁），表1に見られる方言使用意識の高さは，まさにそれと対応するものである。実際，インフォーマントの76％が地元の学校で方言を「よく使っている」と答えているのである。近年，若い人の間で方言の固有の語彙が使われなくなっているようだが（真田1989，10～14頁），その反面，自分が日常（くつろいだ場面で）使っていることばは方言であると意識している若者は多いことを表1の回答は示しているのである。

出身地方別にみた場合，関東，中部，北陸の点数がやや低い（平均点3.50，3.49，3.58）のに対して，西日本の各地方の点数が高い（3.74以上）のが目につく。さらに，平均点の最も低い北海道・東北（2.96）と他の7地方との間には有意差が認められる(以下，$p<.05$ の場合に有意差ありとする。表では，有意差が認められる場合に＊で示す)。要するに出身地での方言使用において，北海道・東北のインフォーマントは他の地方のインフォーマントと著しく違う。地方の違いは特に「よく使った」の回答

者の割合に目立っている。「よく使った」と答えた人はほとんどの地方で6割〜8割を占めているが，北海道・東北だけは33%という低い数字を示している。

次に，インフォーマントが京阪へ来てから出身地のことばをどのくらい使っているかをたずねてみた。これに関する質問項目と結果は次の通りである。

図1　出身地での方言使用

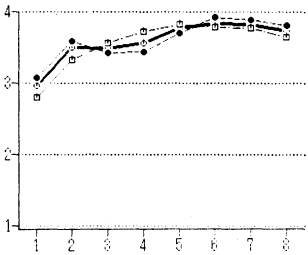
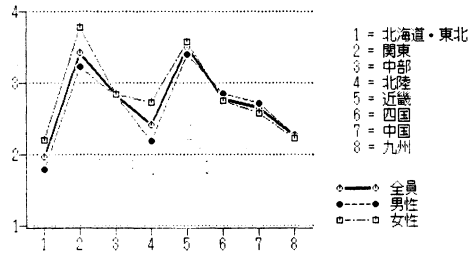


図2　京阪での出身地の方言使用



質問2　大阪／京都に来てから，出身地のことば（方言）を　(4)よく使う　(3)時々使う　(2)ほとんど使わない　(1)全然使わない

表　2　　京阪での出身地方の方言使用——出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
人数	24	26	63	27	143	37	54	43	417
平均点	1.96	3.42	2.82	2.41	3.50	2.78	2.65	2.26	2.93
有意差		*	*		*	*			

この質問の平均点（2.93）は質問1（3.66）より著しく低い。出身地にいる時に比べ，京阪では出身地の方言を使用することが少ないようである。

出身地方別でみると，出身地の方言を最も多く使っているのは近畿と関東である。この2地方と他の6地方との間には有意差（*）が認められる（表2）。

近畿の人は京阪に近い方言を持っているので，京阪へ来ても出身地の方言をそのまま使っていることが考えられる。また，関東に関しては，出身

地のことば＝標準語だという意識が強いため，京阪へ来ても出身地のことばを使うのであろう。一方，最も低い地方は北海道・東北と九州の２つである（この２地方と他の６つとの間には有意差が認められる）。これには，これらの地方のことばが，特徴の強い，ほかの地方の人には分りにくい方言であることが関与していると思われる。

次に，京阪地区へ来てから，京阪のことばをどの程度使うようになったか（京阪方言の使用について）をたずねた。

質問３　大阪／京都に来てから，大阪／京都のことば（大阪／京都弁）を　(4)よく使う　(3)時々使う　(2)ほとんど使わない　(1)全然使わない

表３　京阪での京阪方言の使用――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
人数	24	26	63	29	140	37	54	43	416
平均点	2.33	2.61	2.82	2.97	2.84	2.95	2.85	2.88	2.82

まず，北海道・東北と関東は他の地方よりやや低いことが指摘できる（表３）。近畿の使用度が北陸や四国より低いことについては先の質問２の結果との関連が考えられる。質問２で，近畿の人は自分のことばを京阪地区で多く使うことが分ったのであるが，近畿の人の場合，出身地方の方言を使えば，京阪の方言を使う必要がない。それゆえ，近畿の人は北陸や四国の人ほど京阪のことばを使わないと意識しているのである。

図３　京阪での京阪方言の使用

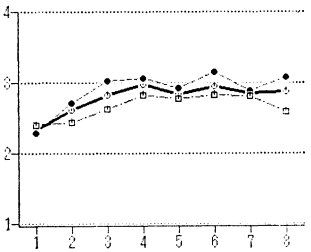
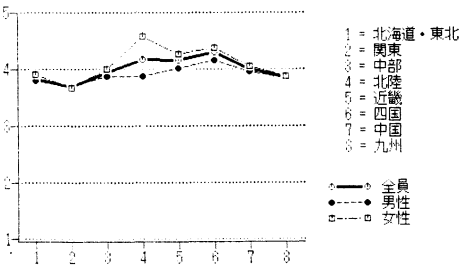


図４　京阪に対する態度



以上に述べた使用意識の質問の他に，言語に対する態度や評価についてもいくつかたずねてみた。

質問4　大阪・京都のことが　(5)好き　(4)どちらかと言えば好き　(3)どちらとも言えない　(2)どちらかと言えばきらい　(1)きらい

表 4　京阪に対する態度――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
人数	24	26	63	29	150	37	54	43	426
平均点	3.83	3.69	3.94	4.17	4.15	4.30	4.00	3.86	4.04

まず，京阪のことがどのくらい好きかという質問では，次のような傾向が見られる（表4）。京阪から離れている北海道・東北，関東，中部，九州は平均より低い。東日本や九州は西日本以外の独立した文化圏をなしていると言われているが，それを反映する結果であると言えよう。一方，近畿とその文化的周辺部に位置する北陸と四国は平均より高い（中国は平均並である）。

質問5　大阪・京都のことば（大阪弁・京都弁）が　(5)好き　(4)どちらかと言えば好き　(3)どちらとも言えない　(2)どちらかと言えばきらい　(1)きらい

表 5　京阪方言に対する態度――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
人数	24	26	63	27	150	37	54	43	424
平均点	3.21	3.69	3.60	3.67	3.94	3.81	3.78	3.63	3.75

図5の曲線は上の質問4の（図4）とよく似ている。ただし，質問4では北陸や四国より低かった近畿がここで京阪のことばを最も高く評価している。最も低い地方は北海道・東北である。しかし有意差は認められない（表5）。

次に，インフォーマントは京阪に来てから，自分のことばがどの程度変わったと意識しているかをたずねた[2)]。

質問6　大阪・京都に来てから，普段しゃべっていることばが　(5)大きく変わった　(4)少し変わった　(3)どちらとも言えない　(2)ほとんど変わっていない　(1)全く変わっていない

表 6　　ことばの変化の程度――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
人数	20	26	57	22	127	33	40	35	360
平均点	3.60	3.00	3.61	4.09	2.54	3.82	4.02	4.11	3.33
有意差					*	*			

関東と近畿の数字がかなり低い点が注目される。近畿とその周辺の地方との間には有意差が出ている（表6）。この結果は「京阪での出身地の方言使用」（図2）とほぼ逆の形になっている（図6）。近畿は京阪の周辺

図5　京阪方言に対する態度

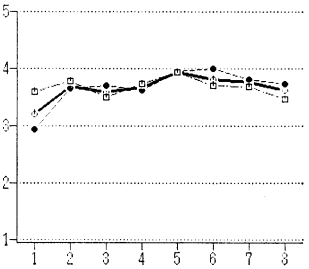
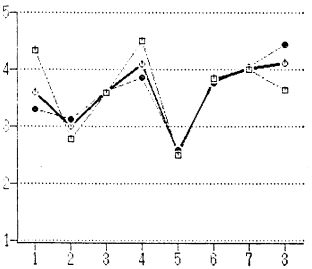


図6　自分のことばの変化



1 = 北海道・東北
2 = 関東
3 = 中部
4 = 北陸
5 = 近畿
6 = 四国
7 = 中国
8 = 九州

全員
男性
女性

にあるので，ことばに変化を感じないのは当然であろうが，関東の場合は，「自分たちのことばを標準語であると考える」彼らの，京阪方言に対する対抗意識の表れと見なすこともできよう。

サブ質問7　（6で変わったと答えた人に）大阪・京都に来てから，ことばを意識的に変えようとしている／が自然に変わった

表 7　　ことばを意識的に変えた人の割合――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
比率	41.67	30.77	16.67	15.79	15.91	15.38	22.58	17.86	19. 62
人数	12	13	36	19	44	26	31	28	209

図7　ことばを意識的に変えた人の割合

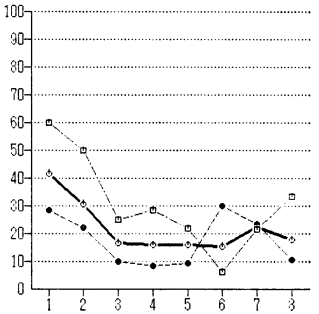


図8　ことばを合わせる人の割合

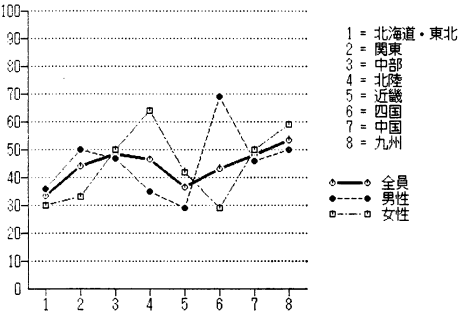


図7では，「自分のことばを意識的に変えた」人の割合をパーセントで表している。全体的に言えば，意識的に変えた人は少ない。相対的に多い出身地方をあげれば，北海道・東北と関東がある（表7）。ただし，有意差が認められるほどではない。

質問8　大阪・京都で，大学の友達が大阪弁・京都弁で話したら，その人のことばに合せて，大阪弁・京都弁をしゃべろうとする／その人のことばに合せようとしない

表 8　　ことばを合せる人の割合――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
比率	33.33	44.00	48.39	46.43	36.43	43.24	48.15	53.49	43.10
人数	24	25	62	28	140	37	54	43	413

「京阪方言を話す相手のことばに合せようとする」人は全体の43.1%にも達しているが，出身地方別にすると，一貫した傾向は見られない（図8，表8。有意差が認められない）。なお，この質問は，欧米の言語学界で注目を集めている「順応論」（アコモデーション論）との関連で設定したものである。「順応」とは，話し相手との心理的距離を縮めるため，相手のことばと自分のことばとの相違を少なくしようとする行動である。「順応論」の問題点の1つとされているのは，話者が意識的に順応するか，無意

識のうちにするかという点である（Beebe & Giles 1984,11頁）が，以上の結果（合せる人は全体の43.1%）を見た限りでは，「順応」は意識的に行われることが多いように思われる。

質問9　大阪・京都で出身地のことば（方言）が出たら　とても恥ずかしい／少し恥ずかしい／別に恥ずかしくない／全然恥ずかしくない

表 9　恥ずかしい人の割合――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
比率	37.50	0.00	22.22	37.04	9.86	32.43	40.74	30.23	22.60
人数	24	26	63	27	142	37	54	43	416

インフォーマントを出身地方別に分けてみると，方言が恥ずかしくない人は関東と近畿に多く，中部は中間的で，その他の地方は恥ずかしい人が比較的多い（図9，表9）。

今回の結果をNHKの全国県民意識調査（NHK1979）における「地方なまりが出ることははずかしいことだと思いますか？」という質問に対する結果と比較して見よう。まず，NHKの調査では「はずかしい」人の全国平均点が14.8%であり，若い人はこれよりさらに低いと報告されている（数字なし）。一方，今回の調査結果で「少し」と「とても」の回答を合せると，「はずかしい」人の割合いは22.6%となり，NHKの結果に比べて随分多いように思われる。この2つの調査は簡単に比較できるものではないが，14.8%（以下）と22.6%との差の原因の1つは実際の移住経験の有無に求めることができる。つまり，NHKの調査で対象となった，地元の地方に住んでいる人に比べて，今回の調査の対象である大学生の場合は自分の方言を話す人がまわりに少ないので，方言を使う自信をなくしていることが考えられるのである。なお，NHKの調査では，「はずかしくない」人は関東と近畿に多く，「はずかしい」人は東北，北陸，四国，九州に多く，中部は中間的である。要するに今回の結果と同じ傾向が現れてい

図9　恥ずかしい人の割合

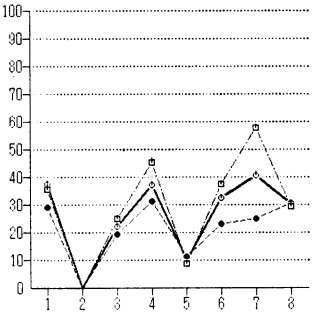
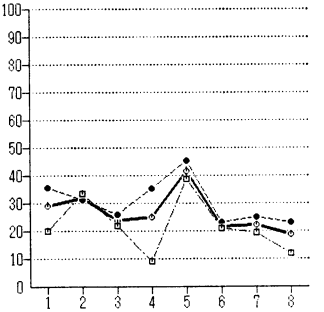


図10　誇りに思う人の割合



1 = 北海道・東北
2 = 関東
3 = 中部
4 = 北陸
5 = 近畿
6 = 四国
7 = 中国
8 = 九州

全員
男性
女性

る。それゆえ，今回の調査結果にはそれぞれの地方の性格が反映されていると見なしてよいと思われるのである。

質問10　自分の普段しゃべっていることばを　誇りに思っている／どちらとも言えない／誇りに思っていない

表　10　　誇りに思う人の割合――出身地方別

出身地	北海道・東北	関東	中部	北陸	近畿	四国	中国	九州	全員
比率	29.17	32.00	23.81	25.00	41.61	21.62	22.22	18.60	30.02
人数	24	25	63	28	149	37	54	43	423

自分のことばを誇りに思っているかどうかという質問では，「どちらともいえない」という消極的な回答が最も多かった（近畿の51.7％から北陸の71.4％まで）が，表10では，積極的に「誇りに思っている」と答えた人の割合を表示する。ここで「誇りに思っている」と答えた人が最も多いのは近畿地方（41.6％）であるのは興味深いところである（ただし，有意差は認められない）。

なお，「どちらとも言えない」と答えたインフォーマントが全体の59.8％を占めている点から見て，ほとんどのインフォーマントにとって，方言というものは「誇りに思う」かどうかという点で意識されるものではない

ようである。また，「誇り」（図10）は「恥ずかしさ」（図９）とはほとんど無関係であると言ってよい。

3.0.　言語変種の使い分け

第２章では言語意識に見られる地方差を見てきたが，京阪での京阪方言の使用意識が地方によって異なることが明らかになった。そこで，本章では，いくつかの違った場面において，言語変種（京阪方言，出身地の方言，標準語）がどのように使い分けられているかを考えてみることにする。

今回の調査では，場面という概念を３つの要素から成り立つものとしてとらえた。具体的には，話を聞いている「相手」，話の行われている物理的な「場所」，そしてその他のまわりの状況を合せた「状況」の３つである（この３つの要素，特に「場所」と「状況」との区別は，現実の問題としては確かに微妙であるが，以下の場面設定の違いをはっきりするため，この３つの要素を分けて扱う）。

まず，話し相手を統一し，話す「場所」が言語変種の選択に与える影響についてみることにしよう。調査票では，次の５つの場面を設定した。

(1)大阪・京都でデパートの店員にたずねる時

(2)大阪・京都で東京の友達としゃべる時

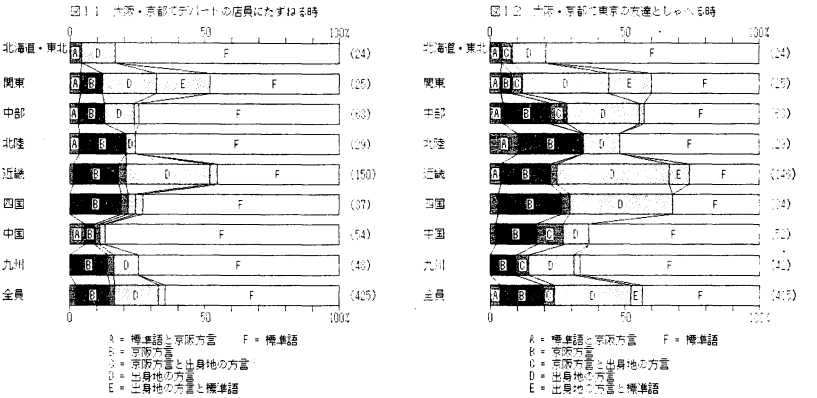
(3)大阪・京都であなたと同じ地方の友達としゃべる時で
　まわりに大阪・京都の友達が何人かいる場合

(4)大阪・京都であなたと同じ地方の人だけが集まって
　気楽にしゃべる時

(5)大阪・京都で大阪・京都の友達としゃべる時

3.1.　京阪のデパート

今回設定した５つの場面の中で，標準語が最も多く使われる場面である。



(図11)。これは公的な場で，知らない人に話しかけるということで標準語がよく使われているものであり，予想通りの結果である。

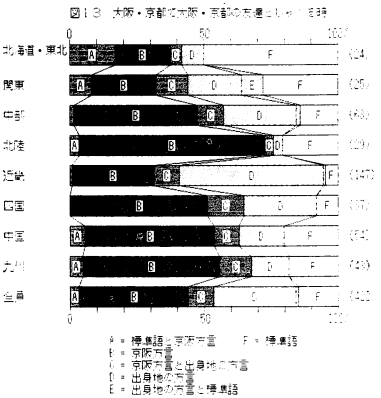
自分の方言を使う人は関東，北海道・東北，中部，近畿に多い。近畿の出身者にとって「自分の方言」とは近畿方言である。近畿地方出身者が京阪のデパートで「自分の方言」を使うということは京阪方言と似た近畿方言を使っていることを意味する。一方，東日本（特に北海道と関東）の人の場合，「自分の方言」とは標準語（またはそれに非常に近いことば）であると認識している人が多いことが予想される。それゆえ，この場面で使われていることばは標準語だと解釈してよいであろう。要するに，近畿の人は方言を京阪のデパートで比較的多く使っているが，それに比べて他の地方の人のほとんどは標準語を使っていると言ってよいようである。この場面では，京阪方言の使用が全体的に低いが，その使用が比較的多い地方は北陸，近畿，四国，九州の人達である。

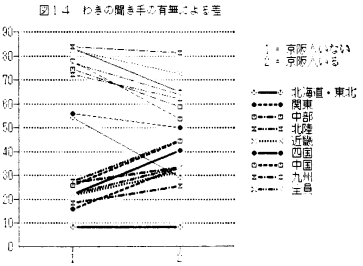
3.2.　東京の友達

以下の場面2〜5は，場面1の公的場面と違って，話し相手が友達となっている。まず，「デパート」の場合に比べ，「東京の友達」の場面（図

12）で，非標準語の変種（「自分の方言」と「京阪方言」）の使用がかなり多くなっている。逆に，場面2〜5の「相手」は全部「友達」となっているが，この4場面のうち，標準語使用が最も高いのは「東京の友達」に対した時である。インフォーマントの半分くらいが標準語を使うと答えている。残りの3場面はいずれも標準語の使用率は20％以下である。

地方別でみると，近畿や四国の出身者は東京の相手と話しても，自分の方言を用いる人が大半である。これに対して，中国や九州の出身者では標準語に切替える人が多い。





3.3.　京阪の友達

今回設定した5つの場面のうち，京阪方言が最も多く使われる場面である（図13）。「京阪方言」のみを使うと答えている人だけでも，4割強に達する。これに，「京阪方言と標準語」や「京阪方言と自分の方言」と答えた人を加えると50％以上になる。地方別においては，東日本に比べて，西日本が京阪のことばをよく使用しているのであるが，近畿地方だけは使用率の低さが目立っている。これは近畿のことばが京阪方言に似ているため，近畿の人が自分の方言をそのまま通用させていることを意味するものと考

えられる。

3.4. 同じ地方の友達

「東京の友達」の場合に比べて，標準語の使用がさらに減っていき，この場面では「出身地の方言」と「大阪弁」を合せた割合は，80%を越える。場面4と場面5は両方とも「出身地の人」を相手にしているが，場面4の場合には「京阪の人がまわりにいる」のに対して，場面5は「出身地の人しかいない」という設定である。

京阪の人がわきの聞き手として存在することによって，標準語の総合使用率（つまり，「標準語」と「標準語と京阪方言」と「標準語と自分の方言」との3つの回答を合せたもの）は5%くらい高くなる（表11）。しかし，それよりもむしろ，「京阪方言」の使用率の10%の上昇の方が劇的である。なお，「自分の方言」の使用率はその分低下する。この結果は，言語変種の選択を左右する要素としての「状況」（この場合はわきの聞き手）の重要性を如実に物語るものとして注目される。

表 11　わきの聞き手の有無による差

	場面4　京阪の友達がいる	場面5　京阪の友達がいない
標準語	17.61（74人）	12.11（51人）
京阪方言	33.33（140人）	22.09（93人）
自分の方言	63.80（268人）	76.96（324人）

図14は，京阪人の有無によって，「自分の方言」の使用率がいかに減るかを地方別に示したものである。横軸の1が場面5（京阪の友達がいない場合）で，2が場面4（京阪の友達がいる）である。図の上でかたまっている薄い線は「自分の方言」の使用率で，下にかたまっている太い線は「京阪方言」の使用率である。いずれの地方も，「自分の方言」の線は左から右へ下がっている。下降の特に目立つ地方は北海道・東北，中国などである。一方，下降が比較的ゆるやかな地方としては北陸と関東がある。

まわりに京阪人がいるかどうかによってことばが変わる原因としては，次の2つのことがまず考えられる。1つは，京阪の人の前で自分の方言をしゃべったら，まわりの京阪人が話を理解できないから，まわりの人が分ることば（京阪方言，または標準語）を使おうとすることである。もう1つは，京阪の人がまわりにいると他地方の人が恥ずかしがって，方言をしゃべらないことである。

しかし，現代の若者の使っている方言がお互いに通じない場合はさほど多くないと思われる。その上，この場合の話し相手は，自分の地方のことばがわかる同地方の出身者である。にもかかわらずこれらの話者がことばを変えるという点から見て，他地方の出身者はまわりの目を気にし，自分の方言を控えると解釈した方が自然であろう。この仮説を裏付けるデータを先述した意識項目の結果から探ってみよう。

先に見た，「京阪で出身地のことばが出たら恥ずかしいか」という質問において，「恥ずかしい」と答えた人の多い北海道・東北や中国は，図14で最も急な下降を示している。逆に，恥ずかしくないと答えた人の多い関東地方の下降はゆるやかである。それゆえ，一般には，自分の方言に対する恥ずかしさと，その方言を京阪の人の前で隠そうとする意識とは関係していると解釈してよいと思われる[3)]。

以上，場面2〜5では，「場所」を京阪に統一して，「相手」を変えることによって言語変種がどう変わるかを見てきた。出身地方によって京阪方言の使用度が異なるとは言え，大体の傾向として，「デパート」，「東京の友達」，「出身地の友達」，「京阪の友達」の順番に京阪方言の使用度が上がっていくことがわかった。

さらに，同じ相手（出身地の友達）でも話の「状況」（この場合は，京阪の人がまわりにいるかどうかということ）によって，選ばれる言語変種が変わってくることが明らかになった。

4.1.　語彙・語法項目の使用率

ここでは，京阪地区の若年層がよく使っていると思われる語彙・語法に関する35の項目について，その使用状況を概観することにする。まず，この35項目のうち，出身地ですでに使っていた項目を算出した結果を示したものが図15である。これを「使用率」と呼ぶ。近畿方言と京阪方言とは非常に似ているため，近畿の出身者の使用率はとびぬけて高い（6割以上）。なお，2番目の四国の使用率はこの半分くらいに止まっている。

図15　全項目の使用率

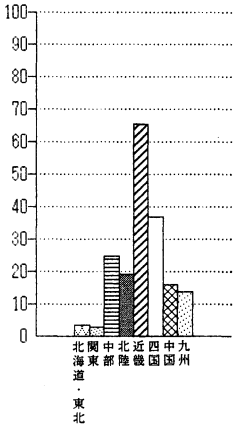


図16　「〜チャウカ」の受容率

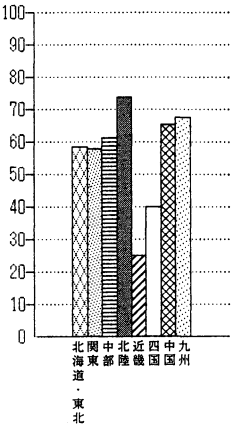
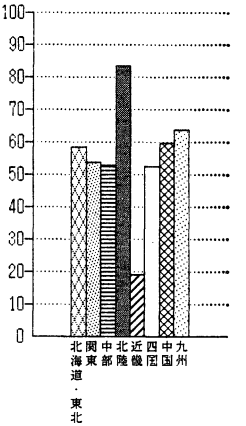


図17　「ヤ」の受容率



4.2.　語彙・語法項目の受容率

次に，すでに出身地で使っていた項目を省き，残りの（京阪へ来るまで使っていなかった）項目のうち，京阪へ来てから使うようになった項目の割合を算出し，これを「受容率」と呼ぶ。ここで，いくつかの語彙・語法の受容率を項目別で見よう。

まず，「〜ジャナイカ」という意味での「〜チャウカ」の場合，東日本も西日本も受容率が高い（図16，$x^2=14.90$，$p<0.037$）。東日本には，こ

の用法自体はないものの，「チガウ」という語形は存在するため，抵抗なくこの表現を受容しているのであろう。

次に，断定助動詞の「ヤ」の受容率も「ーチャウカ」と同様の傾向が認められる。これは，「ヤ」が東日本で使われている「ダ」と音声的に似ていることが，その受容しやすさに関与しているのではなかろうか。中でも，北陸地方の受容率の高さは特に目立つ（図17，$x^2=18.93$，$p<0.008$）。北陸で，「ジャ」が「ヤ」に侵蝕されていることはすでに報告されている（真田1983）。「ジャ」と「ヤ」との争いの最前線では「ヤ」のほうが丁寧であるといったプラスのイメージで評価されているようである。それゆえ，そのような意識が今回のインフォーマントにも働いていると考えてよいと思われる。

図18　「イカヘン」の受容率

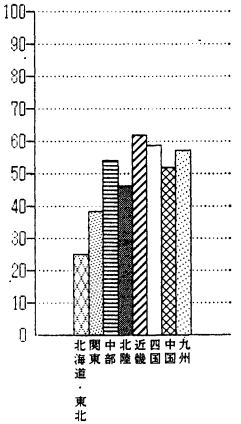
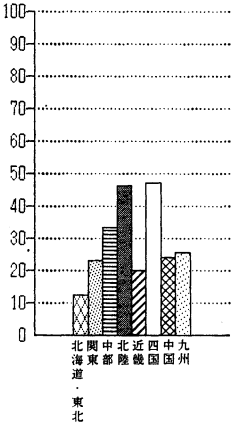


図19　「イキハル」の受容率



なお，「ーチャウカ」と「ヤ」では，近畿の出身者の受容率が最も低い。これについては，次のようなことが考えられる。すなわち，ここでとりあげる近畿の人は，出身地において，これらの語形を耳にしながら受け入れようとしなかったと予想される。それゆえ，彼らはこれらの語形に対して

否定的な意識をもっていると見なすことができる。だから，京阪に来ても，積極的に使おうとはしないのであろう。

一方，「ーチャウカ」や「ヤ」の場合とは対照的に，「イカヘン」の受容率は北海道・東北と関東とでは非常に低い（図18)。「ヤ」と同じように，「ヘン」は西日本で否定辞「ン」の領域を侵蝕している。しかし，「ヘン」が「ナイ」を用いる地域に進出した例はほとんどない。おそらく，「ヤ」と「ダ」よりも，「ヘン」と「ナイ」との音声的な相違が大きいため，この語法は東日本の人には受容されにくいのであろう。

最後に，「ハル」敬語の一例して，「イキハル」の受容率を見ることにする（図19，$x^2=18.53$，$p<0.009$)。京阪の周辺にある北陸と四国の出身者は「イキハル」を比較的よく受容しているが，京阪を離れれば離れるほど，その受容率が下がっていく。「イキハル」があまり受容されない背景には色々な要因がからんでいるものと思われる。例えば，今回の対象となった大学生は敬語を使う機会が少ないこと，また，京都には「イキハル」とは違う「イカハル」という表現もあることなどが考えられる。それに，「ハル」敬語は，上の「ヘン」と同じように，音声的に東日本などの敬語形式とは極端に違うものであることが関与している可能性は否定できない。

5. おわりに

以上，京阪地区にやって来た他地方出身の大学生の言語意識，言語変種の使い分け，京阪方言の具体的な語彙・語法の受容に関するデータを紹介した。様々な地方の性格が現れてきた項目もあったが，特に，関東と京阪（または近畿）との対立意識が現れた項目が多かった。

将来の課題としては，まず，今回の調査のインフォーマントのように，京阪に何年か住んだのち，地元に帰った人がそこでどれくらい京阪で身につけたことばを使用するかを明らかにすることがあげられる。また，その

まわりの人々の反応はどうであるのかといった問題もある。都会に住んでいた大学生が地方に帰った場合，その人のことばが地元の人々の間で「都会的」であると感じられるならば，その個人は都会から持ち帰ったことばを地元で広める役割をになうことも考えられる(Trudgill 1986, 56〜57頁)。どういう人が，どのようにして，都会のことばを地方にもたらし，広めるのか，その実態を明らかにしていきたい。

注

1) 質問1，2，3，4，5，6の平均点は次のように計算した。
   1. 回答に点数をあたえる。(好き＝5，どちらかといえば好き＝4，どちらともいえない＝3，どちらかと言えばきらい＝2，きらい＝1)
   2. 出身地方ごとに平均点を算出する。
   3. 各グループの平均点との間に有意差が認められるかどうかをt検定によって調べる。
2) 質問6と7では，サブ質問「大阪・京都に来てから，大阪・京都のことば(大阪弁・京都弁)に近くなった／標準語に近くなった」で「大阪・京都のことば」と答えた人のみを対象にしているのである。
3) ただし，「恥ずかしい」と答えた人がかなり多いのに，北陸地方の線は北海道・東北や中国ほど急な下降を示していない。

参考文献

稲垣文男，他　(1980)「日本人の言語意識」『NHK放送文化研究年報　25』

真田信治　(1983)「『ジャ』と『ヤ』の闘争過程　一集落全数調査と録音文字化資料から」『国語学研究』23号　東北大学文学部

真田信治　(1989)『日本語のバリエーション』　アルク

NHK放送世論調査所編　(1979)『日本人の県民性・NHK全国県民意識調査』

NHK　(1980)「現代人の話しことば」『文研月報』　v. 30　2月号

Beebe, Leslie and Howard Giles. (1984) "Speech-accomodation theories: a discussion in terms of second-language acquisition" *International Journal of the Sociology of Language* 46

Trudgill, Peter. (1986) Dialects in Contact. Oxford: Basil Blackwell.

謝辞

資料の集計には，SPSS-X 及び荻野綱男氏の開発した GLAPS，図の作成には田原広史の開発した GDP を利用させていただきました。

最後に，アンケートにご協力くださった先生方，学生にお礼を申し上げます。

（大学院後期課程学生）